
白き竜の魔法

鬼狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き竜の魔法

【Nコード】

N0520Q

【作者名】

鬼狐

【あらすじ】

僕、天白あましろ 龍也りゅうやは、春休みに不思議な夢を見た。

それから数日が経ち、高校の入学式の日の帰り道に、顔が三つもあるケルベロスに遭遇して、自分の体はドラゴンになるし……どうやら、僕の高校生活は、“フツー”では過ごせないようです。はい。

プロローグ 『夢』（前書き）

初めてのポケモンなしのファンタジーです。
人気でるかなー♪

ま、人気が出なければ消せばいいですけどね（撲殺）

それでは、どうぞ！

プロローグ 『夢』

志望校合格に浮かれて遊び倒していたある夜に、ある夢を見た。
その夢は、不思議な夢だった。

僕は、浜辺に立っていた。

周りを見渡しても、何も無い海と浜辺が続いていた。

行った記憶がないのに、懐かしい感じがした。

だけど、それだけじゃなかった。

僕の目の前には、『ドラゴン』がいた。

上には鋭く尖った角が2本、蒼の眼には縦長の瞳孔があり、その下には長く伸びた顔と大きく裂け鋭く大きな牙の生えた口。

それに長い首に、背中には蜻蛉のような羽が付いている。

そしてなにより、体全体を覆っている純白の鱗。手足も、同じように純白の鱗で覆われている。

普通の僕なら、驚きすぎてその場を動けずにいるかもしれない。
もしかして、腰が抜けていたかもしれない。

だけど、そんなことは、なかった。

ずっとこのドラゴンは、僕のことを見ていた。
僕も、同じように、ドラゴンを見ていた。

このドラゴンを見ていて、『恐怖』というモノを感じなかった。

ただ、このドラゴンから感じるものがあつた。

それは、なんだか僕に『似てる』気がした。

なんでそう思ふのかは分からなかったけど、そんな気がした。

僕は、微笑んだ。ドラゴンに向かって。

そうしたら、ドラゴンも微笑んだ。……ように見えた。

——ああ、わかった。

このドラゴンは、僕に『似てる』んじゃない。

このドラゴンは、僕と『一緒』なんだ。

——『似てる』ではなくて『一緒』なのだ。

——夢は、そこで途切れた——

不思議な夢だった。

だが、その夜から、またその夢を見ることは、なくなった。
つまり、『僕にとって別に関わりのない夢だったんだ』そう思った。

そして、僕は…この夢の“意味”を知らずに高校生活をスタートさせたのだ。

プロローグ 『夢』（後書き）

如何でしたか？

とりあえず、プロローグは書いたんですが、あらすじの主人公の名前を変っスかね？

まあ、とりあえず、第1話に続きます。多分。

第1話 『入学』

——春。

それは、出会いと別れの季節。……なんてよく聞く。
そんな春のとある日。

「龍也、ハンカチ持った？」

僕、あましろう じゅうや天白龍也は、高校の入学の日に、自分の家の玄関で持ち物検査を行われていた。

「持ったよ」

「ティッシュは？」

「持ってるよ。大丈夫だって」

と、僕の目の前にいて、持ち物検査を行っている小学4、5年生ぐらいの大きさの女の子に言う。……いや、女性かな。

「何が、だいじょーぶよ！ ほら、髪だって跳ねてるし、ネクタイも歪んでる！」

「だから、これでいいんだって！ こーゆー着こなしなんだって！
母さん！」

「龍也もついに反抗期に……！ でも、お母さん負けない！」

「何の話？」

そう。この目の前にいる小学4、5年生ぐらいの背丈の人は、僕の母さん。

名前は、あましろ なつみ 天白夏海（41）だ。

ポニーテールで、身長は、大体小4、5学年生ほどで、どこからどう見ても子供に見える。41歳には見えない。

そんなことなど本人は、まったく気にしていないらしい。

「絶対に、知らない女の人について行っちゃダメよ！」

「行かないよ！ ってか！ 過保護過ぎだよ！」

「だって、龍也は、色々なトラブルに巻き込まれるんだもん」

「だからってついて行かないよ。それじゃあ！ 行ってきます」

「いつてらー」

僕は、学校へ向けて歩きだした。

数分後、僕の通うことになる高校、ソウシュンがくえん『蒼春学園』に到着した。
変な名前……だよ。とりあえず、気にしちやいけないね。

蒼春学園は、創立およそ70年の高校で広大な敷地面積を誇っている。大きさはおよそ東京ドームの二倍。室内プールや剣道場なども、完備されている。勿論、体育館もある。

式典前の時間は教室で待機することになっていた為、掲示板に貼り出されていたクラス割りを確認し教室に入って、出席番号順に指定された自分の席の机に荷物を下ろして、自分の席に座った。

そして、そのまま窓から見える景色を見ていた時に、声を掛けられた。

「あの…！」

「へ？」

振り向くと一人の少女が立っていた。

「あの、私、同じクラスになった五十嵐舞いがらし まいといっています」

五十嵐 舞という女の子は、腰ぐらいまである長い黒髪と、パツチリとした大きな瞳が特徴な女の子だった。

そして、

でも、なんでこんな展開に？

「あ、僕は、天白 龍也。よろしく」

「はい。よろしくおねがいします！」

と、軽くお辞儀をし、「それでは！」というと周りの男子や女子に挨拶しに向かった。

……なるほど。このクラス全員に挨拶しているのか。

と、その時。

パコオン！ と、そりゃあいい音になった。

「いっつたあ！」

頭に痛みが走った。痛む頭をおさえて、あまりの痛さで涙目になった目で振り返る。

そこには、五十嵐さんとは別の見慣れた少女が立っていた。

「何すんだよ！ 藍！ 暴力反対！」

「藍」と呼ばれた少女は、今の龍也を鼻で笑った。

うおすみ あい
魚住藍。

それが、彼女の本名。そして、僕の幼馴染みだ。いわゆる腐れ縁だ。

彼女は、肩までしかない茶髪だけしか特徴がない。いや、これも特徴といえるのかな？ そして、胸はペツタンコ。

あ、もう一つあった。それは、彼女の右手に握られているスリッパだ。

彼女は、大阪出身だった為か、スリッパを常備している。なお、関西弁はあまり喋らない。

それに、そのスリッパとアイの足技（つまり蹴り）は、計り知れない威力を持つ。

「あんだ、なに舞ちゃんを見て鼻の下伸ばしてんのよ」

「へ？」

舞ちゃん？ … あ、五十嵐さんか。

いや、鼻の下伸ばしてないって。 …… いや、少し見惚れてたけど。

「変態」

「何で!?!」

「じゃあ、スケベ」

滅茶苦茶ウザイ。

「ま、どうでもいいや」

「どうでもいいのかよ!」

「それじゃあ、あたし新入生代表のこととかあるから。じゃあね」

というと、藍は教室を出ていった。

「あの、龍也さん」

「うへ?」

あ、変な声出た。恥ずかしい。

「藍ちゃんと知り合いだったんですか?」

「あ、うん。でも、五十嵐さんと藍って知り合いだったんだね」

「はい。中学生の時に」

知らなかった。

それから、数分後に先生と思われる人物が教室に入ってきた。

「どうも、このクラスの担任になった雨宮^{あみや}ラルクです　みんな仲よくねえ」

「……うわぁ」

なんだこの人は、あまり見たくない。

「そ、そんな！　一発目で、自分の属性を生徒に印象付ける作戦が通じない!?」

「……何この先生」

全部否定するつもりはないけど、今は必要ないと思います。

「それじゃあ、これから入学式が始まるから、体育館に並んでしゅっぱあ〜っ」

駄目だ。この人のテンションについていけない！

第1話 『入学』（後書き）

書き終えて思うこと…女多っ！！

うゝむ。結局、もう少しキャラを増やしておくべきか？

物語の本格始動は、次回からです。

第2話 『覚醒』

あれから、入学式も終わり、ただいま下校中。五十嵐さん付きで
いや、別に誘ったわけではなく、誘われたわけでもない。

普通に下校中に、バツタリ五十嵐さんと合ってしまっただけだ。

「そ、そういうば、五十嵐さんって、学校で皆に挨拶してたよね？」

なんで？ それが僕の疑問。

「はい！ 挨拶は大切ってお母さんから聞かされましたから」

疑問解明。

そんな会話を続けていたら、道が二手に分かれる所についた。

「私の家は、こちらです」

五十嵐さんは、右の道を指差しながら言う。

「僕は、こっちだから」

僕の家への道は、左だ。つまり、ここでお別れだ。
明日、学校で合うけど。

「それでは」

「うん。それじゃあ」

五十嵐さんは、右の道を走っていつてしまった。

僕も、帰ろうと足をすすめるが、すぐに立ち止まってしまった。

「？　なんだあれ…？」

僕は、空を見上げながら言った。

その空には、大空の青とは別の黒い魔法陣（？）が描かれていた。

「魔法…陣？」

勿論僕だって、漫画を読んだり小説を読んだりする。

だから、あんまり本物とは思いたくはないけど、予想はつく。

「うわっ！」

すると突然魔法陣（？）から無数の黒い光が地面に落ちてきた。

黒い光は、眩しくて僕は、目を瞑ってしまった。

「グルルルル…」

何か、獣のような唸り声が聞こえてくる。犬…？

そう思っ、目を開けてみるとそこにいたのは、普通の狼より大きな体で、三つの頭があり、長い尻尾のある漆黒の毛並みの狼がいた。

「ケル…ベロス…！？」

『ケルベロス』ギリシア神話における冥界の番犬。

ローマ神話ではケルベルスという。その名は「底無し穴の霊」を意味するらしい。

そんなケルベロスがなんでこんな所に……？
てゆーか、この世界にいるんだ……。

「グルルルルル」

今更ながら、気づいた。

僕……囲まれちゃってる。

いつの間にか、自分の周りをケルベロス達に囲まれていた。

ケルベロスって、一匹じゃないんだ……。

って！ そんなことを考えて入る隙はない！ と、とりあえず、
逃げなきゃ……！

でも、どうやって？ 今、僕は、囲まれていて絶体絶命で、袋
のネズミ状態だ。

「ガアア！」

その時、二匹のケルベロスが襲いかかってきた。

や、やられる……！

そう思った矢先、ドラマやアニメで聞いたような銃声が突然聞こ
えた。

そして、襲いかかってきたケルベロスが突然倒れた。ケルベロス
の体には、風穴があり、呼吸はしていなかった。即死のようだ。

「龍也さん！ 大丈夫ですか！？」

その声は、先程まで聞いていた女の子の声だった。

「い、五十嵐さん！？」

「はい！舞ですー！」

そこに現れたのは、五十嵐 舞だった。

二丁拳銃を持って……ってなんでそんなモノ持ってるの！？

「ど、どうしてこんな所に……！？」

「そんなことどうでもいいのですー！」

ハッキリ言われた。ちょっとぐらい説明してほしい。

「ガアアア！」

五十嵐さんの後ろからケルベロスが襲いかかってきた。

「あ、あぶな「バンツ」え、えええ！」

五十嵐さんは、後ろを振り向かずに、後ろのケルベロスを撃った。
そして、バタツと倒れて生き絶えた。

って、なんかすぐく慣れてないですか五十嵐さん！？

「グアア！」

またまたケルベロス達が襲いかかってくる。

「しつこいですね！」

対抗するように早過ぎる速さで弾を撃つ五十嵐さん。
もはや、次元が……。

「キャ…！」

五十嵐さんは、隙をつかれ鋭い爪で右肩を引掻かれた。
五十嵐さんの右肩から紅い血が流れる。そのまま、傷口をおさえ
て、膝ついてしまった。

そのまま、ゆっくりと近づくケルベロス。

ど、どうすれば…！ このままじゃ、五十嵐さんが……！
瞬間、身体が熱くなってきた。

「ッ…！！」

なんなんだよ、こんな時！

「ぐあっ！」

身体が焼かれる様な激しい痛みが全身を襲った。

「ぐっ、あああああああああああ…！！！」

あまりの痛さに立ってはいられず倒れこんだ。

「龍…也さん…？」

その時、僕の身体に変化が起こった。

身体中の皮膚は純白な鱗になり、尻尾は生え背中からは、翼が生
えてきた。

そんな変化が終わった頃には、そこにいたのは、一匹の純白なドラゴンだった。

「グルルルル…」

ドラゴンになった僕は、喉を鳴らしていた。
な、何がどうなってるんだ…!!?
僕は、どうなってるんだ!!?

「龍也さん、『竜人』だったんですか!？」

「グア?(はい?)」

竜人? なんだそりゃ?

「龍也さん、早く怪物を……!」

五十嵐さんが、なんか強気になってる……。

まあ、なんだかわからないけど…今はこいつらを……!

ケルベロスの一体が、僕の首筋を狙って飛びかかる。それを大きな尻尾を鞭のようにしなせ、バットでボールを打つようにケルベロスを叩きつけた。

その尻尾の力積でケルベロスは目にも留まらぬ速さで瓦礫に激突し、甲高い断末魔と同時に汚れた血を散らして動かなくなった。ぐ、グロイ……。

「また来ます!」

五十嵐さんの声とほぼ同時に、僕の腕に一匹のケルベロスがぐらいついたが、僕の鱗には傷がつかず、それどころかケルベロスの牙が折れてしまった。

何このチート……。

「その力、デタラメすぎじゃないですか……」

そんなこと言われても……。

って、早くケリをつけなきゃまずいでしょ。

これは流石にグロすぎだ。

数体のケルベロスは、もう全滅した。

胴体が真つ二つなってるものもいれば、もう原形をとどめていない奴もいる。

さすがにやりすぎたかな……グロ過ぎだ。

「……終わりましたね」

五十嵐さん、こういうの見てて吐き気ないんですか？

「助けに来たのに、助けられましたね。ありがとうございます」

「グルル…（どういたしまして…）」

「あの、もしかして、龍也さんって念話のやり方をしたらのですか？」

「グルア？（念話？）」

「…その様子じゃ、知らないみたいですネ」

知らなくて悪かったですねー。

「とりあえず、場所を変えましょう。ここにいてたら色々大変です」

そうですねー。

「とりあえず、あの山あたりまで……」

五十嵐さんが示した山というのは、人の視力からすれば、結構遠い距離だった。ドラゴンからみれば、結構見えますが。

……あの、五十嵐さん？ あの山までどうやっていくんですか？

「はい。乗せてってください」

やっぱりか！

まあ、仕方ないので、乗りやすいように体を低くする。

……なんか『伏せ』してるみたいだなあ。

「なんか『伏せ』してるみたいで、かわいいですね！」

かわいいは、余計です。早く乗ってください。

五十嵐さんが僕の背に乗ると僕は、地面を蹴り、飛びたった。いやー、ほんとに飛んじやいました。ぶっつけ本番で飛べました。すごいですねー、人間って。今はドラゴンですけど！

『Aー、Aー、あー』

目的地の山に到着した僕は、ただいま念話を絶賛練習中なのだ。

「だいぶ良くなってきましたね」

『人間は、進化するんです』

「今はドラゴンですけどね」

ドスツ、とその言葉が胸に突き刺さる。
いいもん。中身は人間だもん。

「それじゃあ、『竜人』のことを説明しますね。竜人とは、竜と人間の両方の血を引き継いでいる者の事をいうんです」

何だと？

それじゃあ…、

『僕の血縁関係の誰かがドラゴンなの…？』

「そういう事ですね。でも、竜人は別に珍しくありませんよ」

あ、そうなんだ。

「それと、龍也さん。もうそろそろ人間に戻ったらどうですか？」

『戻り方がわかりません』

だって、初めてなったんだよ？

「こう、人間に戻れ、とか思えば戻ります。多分」

なんか小説とかありきたりだなあ。しかも多分ってなんだよ。まあ、やってみることにしよう。目を閉じ、心を研ぎ澄ます。

「お、おー」

歓声の声が聞こえると僕は、目を開く。自分の姿を見ると、あら不思議。人間の姿に戻ってるではありませんか。

「戻れた、みたいだね……」

声も、人間ように出せる。よかったよかった。

「これで、一件落着ですね」

「…うん、多分」

何かを忘れてるような気がする。

「…改めて、助けに来てありがとうございます」

「いや、でも、僕だって助けてもらったし。ありがとう」

「どういたしまして、ですっ」

なんか語尾が変わったけど、まあ、いつか。

「それから、龍也さん」

五十嵐さん何か思い出したように口を開いた。

「はい？」

「私のことをこれから『舞』と呼んでください」

「えっ……」

「だって、龍也さんが竜人だってこと知ってますし。そのほうが、親しみやすいじゃないですか」

「そうだけど……いいの？」

「はい、構いません」

「そう……じゃあ、舞。帰ろうか」

「はいっ！」

こうして、僕たちは帰ることになった。

「…あの、龍也さん」

「ん？」

「帰り、乗せてってくれませんか？　ちよつとここからじゃあ家が遠くて……」

……ですよねー。

第2話 『覚醒』（後書き）

最後あたりが、なんか甘い感じがする。

第3話 『襲撃の翌日』 (前書き)

サブタイトルが変だな。

第3話 『襲撃の翌日』

翌日。

空は、快晴だった。昨日のケルベロスの襲撃にあったのが、嘘みたいな空だった。

だが、あれは、決して嘘ではない。僕が、昨日初めてドラゴンになったの真実だ。

それに、それ以来、少し普通の人間より皮膚が頑丈になっており、筋力、視力、聴力、嗅覚など身体能力が格段と向上していることに僕が、ドラゴンの血も引いているんだと分からせられた。

そして、気になっていることは、昨日舞が言ったこの言葉だ。

『竜人とは、竜と人間の両方の血を引き継いでいる者の事をいうんです』

つまりだ。僕の血縁関係の誰かが竜、つまりドラゴンであるということだ。

昨日、帰ったときは、お母さんは、買い物に行っていたので、簡単に風呂場で返り血を洗い流すことができた。

その後、お母さんが帰ってきたが、結局、「僕の血縁関係の誰かがドラゴンなの？」なんて言えなかった。

どうしたらいいんだろう？

そんなことを考えていたら、自分の教室の前までたどり着いた。ドア越しから騒がしい声が聞こえる。まあ、入学式の翌日だからでもあるだろうが、そんな事とは、無縁の話だろう。

僕は、ため息を吐くと扉のとつて部分に触れ、横にスライドするように力をいれる。ガラガラ…という音と共に扉が開いた。

教室は、相変わらず騒ぎ声でいっぱいだった。
僕は、何に騒いでいるのかわかっている。

「はぁ……」

だから、またため息を吐いた。
僕が荷物を自分の席に置いた時に彼女が、やってきた。

「あの……ごめんなさい」

挨拶じゃなくて、謝罪された。大体見当はつく。
今この教室いや、世間を騒がせているあの……ことだろう。

「私があのだを処分していれば……」

舞が、悔しそうに言う。処分って……。

そう、今世間で騒ぎになっていることが、僕が殺してしまった数
体のケルベロスの死体である。

今の教室もこの話題でもちきりなのだ。

「いや、でも、僕にも責任があるし」

まず、舞だけで、数体のケルベロスの死体の処分なんてできない
だろう。

あ、でも、魔法があるからなんとかなるのかな？
それに、殺しちゃったのは僕なんだし。

「まあ、もう手遅れだから仕方ないよ」

「……そう、ですね」

舞は、「それでは。」と言うと自分の席へと戻っていった。
そして僕は、小さくため息を吐いた。

「龍也」

「うへ？」

突然自分の名前を言われ、変な声で返してしまった。
もうこれ癖かな？

「なに変な声だしてんだよ」

「突然声掛けられたからに決まっているよ。雷土」

「決まってるなと思うけどな」

僕にいきなり声を掛けてきたのは、神田雷土^{かんだらいと}である。
雷土とは、小学校からの知り合いで、運動神経も頭も良い。ぶっ
ちやけ真面目である。

「それで、なんのよう？」

大体予想はついているけど。

「あの三つの頭の怪物のことだな」

はい来た。予想通りです。

「あの場所ってここから近いし、お前の家の帰り道だろ？ だから、

もしかしたら知ってんるんじゃないかと思ってな」

なるほど。まあ、知ってますよ？ 襲われましたから。

「あはは、残念ながら見てないよ」

本当は見ましたけど。

それを聞いた雷土は「そうか」と残念そうに呟いた。

「俺さー、なんかドラゴンみたいの見たぜ？」

その言葉に、ビクツと体が反応した。

ま、まさか見られてた！？

「えっと、それホント？ 大地」

それを聞いた大地は「おう」と答えた。

おおやま だいち
大山大地は、雷土とは違い中学から知り合った。

大地は、雷土より頭は悪いが、運動神経はずば抜けている。

それに、合気道、サバット、空手、柔道などの格闘技が得意。色々ありだな、こいつ。チャラ男のくせに。

だが、なんでそんな奴と知り合いなんだ？という問に答えるのは簡単である。

中学の時、大地が宿題を忘れて、たまたま隣の席だった僕が宿題を見せた。ただそれだけである。

「短いッ！そして浅ッ！」というツツコミしないで貰いたい。

「なんかドラゴンみたいのが山の方に飛んでいくの見たんだ」

うわ、見られてたんだ。こやつ侮れん。

「ま、俺以外に誰も見てねーんだけど」

それを聞いて、僕は胸をなで下ろした。

「まあ、あんなものの死骸があつたら、ドラゴンもいっててもおかしくないかね」

いきなり後ろから声が聞こえ、反射的に振り返った。
そこにいたのは、一人の男の子が立っていた。

「……いきなり後ろから出てくるのはやめましょう？ 心臓に悪い」
びつくりするなあ。

「いや、俺、驚かせる為じゃないんだけど」

そういう彼は、風間竜哉は、かざま たつや浮かっていたあの春休みに僕の家
近くに引越してきた。

竜哉は、気配なしにいつの間にか出てくる。忍者ですか？ 彼曰
く、「別にやりたくてやってるんじゃないんだけどね」らしい。

ってか、竜になって色々格段にパワーアップしてる僕なのに気づ
かないって、ある意味おかしいような気がする。

キンコンカンコン、というナイスタイミングでチャイム
が鳴った。

「えーっと、この中であることを知っている人ー、手を上げてー？」
少しだるいHRの時間にラルク先生があのかのケルベロスのことについて訊いてきた。

誰も手を上げない。勿論、僕も舞も手を上げない。

「あれー？ みんな知らないのー？」

と言う先生は、なんだか楽しそうだった。

「それじゃあ、何か分かった人は、先生に言ってねー♪」

その言葉が、特に僕と舞に向けられるような感じがした。

「あ、龍也くんと舞ちゃんは、今日の放課後に屋上にきてねー♪」

…は？

なんで僕たちが呼ばれたんだ？ もしかして、バレた？！

うう、周りの皆から「何したんだ？ お前たち」という視線が痛い。

その後、無事に放課後を迎えた僕たちは、逃げるように教室を去った。

放課後になると誰もいなくなる屋上。なにかもの寂しいなあ。

屋上で黄昏ていた先生は、僕たちが屋上に来たことに気づくと子供のような笑みを浮かべながら、こちら側に手を振った。

「で、なんのようですか？ ラルク先生」

とりあえず、訊いてみる。

「君たちなら、薄々気がついていると思うけどね」

先生は、ころころと子供のように笑う。

「昨日は、派手にやってくれたねえ。一部始終見させてもらったけど」

先生は、再びころころと笑う。やっぱり。

「先生は、見てたんですか？」

見てたんなら助けて欲しかった。

「反応薄いよ？ 龍也くん」

先生は、つまらなそうに頬を膨らませる。

「いや、僕と舞を呼んだところで大体予想はつきました」

「やっぱり？」

「それで、それだけじゃないんじゃないですか？」

「バレたか」

普通は、放課後に屋上に呼び出すぐらいだったら、昨日のことの確認の他に何かあるぐらいの見当はつくだろう。

「えっ？ そうなんですか？」

分からなかったんかい！？

思わぬ舞の発言に驚く。

「流石、龍也くんだね。竜の勘ってやつかな？」

なんだか野生の勘、みたいな感じで言われたけど。

「そりゃあどうも」

「じゃ、本題に入るねー」

先生は、子供のような口調で話し始めた。なんでこの人って、こんなに子どもっぽいんだろうか。

「龍也くんね、色々知ってもらおうと思ってね」

「色々って何ですか？ 例えば」

「例えば」という僕の言葉を聞いて、「うーん」と悩みだす先生。

「昨日の魔物とか？」

なんで疑問形なんですか？

「……昨日の襲ってきた魔物のこと知ってるんですか？」

「うん、大体はね。基本この世界にはね、魔物とかは来ないんだよ」

「……どーゆーことですか？ わかるように20文字以内で答えなさい。」

「あの、意味が分かりません」

「今は分からなくていいんだよ」

と、先生は言うのと、スツと自分の目の位置まで手を上げ、パチンツ、と指を鳴らした。

次の瞬間、目の前の景色が変わった。

周りを見れば、木、木、木だ。森の中だろうか。

「ええっ！？ あの、ここどこですか！」

「森」

見たらわかります。

「まあ、別に気にしなくていいよ。それよりレッツゴー」

先生は、僕にくるつと背を見せるとそのままスキップで進んでいった。

一体何処に連れていく気だろうか。

「龍也くん、早く」

先生のダダをこねるような声で、ハッと顔を上げると、舞と先生が少し遠くにいた。

ええっ、いつの間に。僕は、急いで二人の後を追った。
何があるっていうんでしょうか？

「ココだよ」

ラルク先生に連れられてやってきた所にあつたのは。

「…家？」

僕らの目の前には、森の中にポツンとある家。明らかになんか変だな。

「突撃ーッ！」

ラルク先生は、その家の扉に文字通り突撃して行った。なにしてるんですか。

僕たちも、その中に入っていく。

その家の中は、外見よりも凄く広かった。魔法か何かかな？

その周りには、本棚が沢山あったが、本棚が所々空いている。
その理由は、視線を下にしたらよく分かった。僕らの目の前に本の山があった。

瞬間、いきなり本の山の中から、

「ぶはっ」

ちょっとボサボサの髪の毛のメガネをかけた女の人が出てきた。
何処から登場してるんだ、この人。

第3話 『襲撃の翌日』（後書き）

魔法界とか竜界は、もう少し先のようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0520q/>

白き竜の魔法

2011年10月7日00時37分発行